

人口減少時代の行政評価

～人口減少時代の自治体ベンチマーキング（自治体業績情報の横断的比較・分析）～

平成 26 年度研究報告

1 地域総合指標の現状

自治体の状態を1つまたは少数の総合的な指標で記述する地域総合指標は、しばしばランキング（順位付け）として発表され、少なからぬ注目を集める。一方、これらの指標の数字の質についてはあまり注目されない。ランキングの品質は作成方法次第であるが、多くのランキングの品質は低い。しかし、このことは地域総合指標を作成する意義を損なうものではなく、本格的な地域総合指標を作成する必要性をこそ示していると考えらるべきである。

2 自治体ランキングをランキングする

指標・ランキングの品質の点検に係るチェックポイントは以下の通りである。

- A. 作成目的の明確さ：悪い例－幸福度の概念規定を明確にしないまま幸福度を算出する、など
- B. 基礎データの収集と選択：悪い例－根拠を示さずに少数の指標だけを使い、しかもそれらの情報が重複している、など
- C. 個々の指標の地域間比較：悪い例－「面積当たり病院・診療所数」の比較（∵面積と病院数は無関係）など

- D. 地域間比較結果の指標間比較：悪い例－極端な偏差値を放置したり、75以上の偏差値を根拠もなく75としたりする、など
- E. 総合指標・ランキングの算出：悪い例－順位を合計する（∵順位の数値を足したり平均を計算したりすることは原則としてできない）など
- F. ユーザへの説明・情報開示：悪い例－途中段階の数字や細かい手順がブラックボックスになっている、など

近年発表された自治体ランキングについて上記の観点からチェックした結果を結果数字・ランキングの総合評価(G)とともに下の表に掲げた(○:問題なし、△:やや問題がある、▲:大きな問題がある、×:結果の意味を失わせるほど深刻な問題がある、結果数字が明確な意味を持たない)。点検から得られる教訓は次の一語に尽きる－地域の比較は、基本に忠実に行わなくてはならない。

参考文献

小野達也(2014)「都市ランキングの虚と実－地域総合指標による比較を巡って」『地域学論集』11巻2号

表 自治体・都市ランキング 11 事例の点検結果

	A	B	C	D	E	F	G
	作成目的の明確さ	基礎データの収集と選択	個々の指標の地域間比較	地域の位置の指標間比較	総合化	説明・情報開示	結果数字・ランキングの信頼性
事例① 「都道府県上流度ランキング」(『AERA』2006.4.10, 6.12号) 鳥取県:「総合」18位・「楽し心・生きがい」3位	×	▲	○	▲	×	×	×
事例② 「47都道府県幸福度ランキング」(坂本光司・幸福度指数研究会2011) 鳥取県:「総合」4位など	△	△	△	▲	×	△	×
事例③ 「全国805都市ランキング:安心して住める街」(『週刊ダイヤモンド』2007.8.11・18合併号) 4分野の上位・下位50位以内に県内4市はなし。	○	▲	×	×	×	○	×
事例④ 「全国718都市行革度ランキング」(『週刊ダイヤモンド』2005.7.30, 8.13・20合併号) 境港市「総合」1位、鳥取市「総合」620位など	○	△	○	▲	×	△	×
事例⑤ 「全都市ランキング」(東洋経済新報社『都市データバック2014』) 倉吉市:「総合」66位・「安心度」1位・「富裕度」595位、鳥取市「総合」422位など	△	▲	×	×	△	△	×
事例⑥ 「日本のいい街2012」(『週刊東洋経済』2012.10.13号) 倉吉市:「高齢者が住みよい街」1位・「出産・子育てしやすい街」10位など	○	▲	○/×	×	△	△	×
事例⑦ 「50歳からの住みよい街ランキング」(講談社『セオリー』2011 vol.1) (首都圏・関西圏・中京圏対象のランキング)	△	△	×	×	▲	○	×
事例⑧ 「全国住民サービス番付」(日本経済新聞社・日経産業消費研究所編2001) 鳥取市:「行政サービス水準・総合」県庁所在地の中で45位など	○	○	○	△	×	▲	×
事例⑨ 「生活満足指標」(朝日新聞社『民力2010年版』) 鳥取県:「安定・プラス指標総合」4位・「健康・マイナス指標総合」42位(良い方から)など	○	▲	○	▲	△	○	×
事例⑩ 「都道府県幸福度ランキング」(日本総合研究所編2014) 鳥取県:「総合」4位・「生活分野」2位・「教育分野」2位・「健康分野」27位など	○	△	△	×	△	▲	×
事例⑪ 「新国民生活指標・都道府県別」(経済企画庁、1997年版) 鳥取県:「総合」7位・「働く」2位など	○	△	△	△	▲	○	▲